

ふるさと見て歩き

第28回

高部宿の町並み



▲現在の高部の町並み

美和地域の山あいになたずむ高部宿は、趣のある家が立ち並び古い町並みが残されています。

◇高部宿の歴史

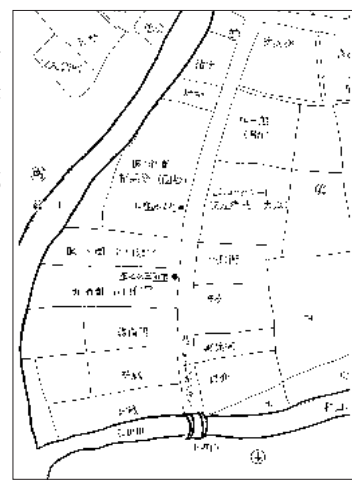
高部は中世以来、軍事や宗教の拠点として栄えてきました。現在の美和総合支所の北東には佐竹七代義胤の五男景義が築いたと言われる高部城があり、常陸・下野の国境で、那須氏からの守りを担う防御線となっていました。近くに諏訪神社、鷺子山上神社、吉田八幡神社、満福寺などの古社寺があり、古くから人や物の交流する地となっていたようです。

江戸時代には特産の和紙を江戸の間屋に卸したり、葉煙草を扱う有力商人の家が何軒も立ち並んでいました。財

政難の水戸藩に献金を行って郷士となるなど、経済的にも政治的にも藩と強いつながりを持つ家が複数ありました。高部村では岡山仙太郎・大森又左衛門・國松権兵衛・堀江喜三郎の四名が郷士として知られています。

◇江戸時代からの建物群

百五十年ほど前に作られた「高部村天保検地絵図」には高部宿の地割りが描かれており、現在の町並みとほとんど変わっていないことがわかります。



▶江戸後期の高部宿
〔美和村史料 近世村絵図〕を元に作成

美和地域を檜沢方面から美和総合支所方面に進み高部宿に入ると、和田川に架かる下町橋（昭和四年架橋）を渡ります。橋を渡るとすぐ左手が「花の友」の岡山酒造、その西隣が「國光」の國松酒造です。江戸から明

治にかけて建てられた古い建物の多いこの通りの中でも両家のたたずまいは一際目を惹きます。ともに現在は廃業してしまいましたが重厚な酒蔵や住居は当時のまま残されています。

高部宿は北と南を山に囲まれ、また緒川と和田川が交わる地点で水には恵まれていました。岡山酒造・國松酒造ともに緒川の流れて面しており、酒造りに適した豊富な水が得られたことでしょう。岡山家の三階櫓は木造で、明治二〇（一八八七）年に建てられ「喜雨亭」と名づけられました。その瀟洒な建物は社交場として使用され親しまれていました。最上層に「花の友」という銘柄が記された美しい姿はこの通りのシンボルとなっています。偕楽園の好文亭を模して、敷地内には梅が植えられていたそうです。これが「花の友」という商標の由来になったということです。



▲元岡山酒造の三階櫓



▲かつての郵便局舎（國松家）

國松家も明治初期から酒造業を営んでいました。近世には紙問屋、村役人を務めた名家で、藩主の巡村の際の休憩所になった記録も残ります。二十五年ほど前に廃業しましたが屋敷内の建物や道具類は当時のままです。屋敷裏の山からは清冽な水が流れ緒川に注ぎます。通りに面して建つ若草色の近代建築は明治時代の郵便局舎でした。

この二軒と細い街道を挟んで向かい合う大森家も江戸後期創建の母屋と門を持ち、やはり村役人を務めた家です。母屋はおよそ二百年前の江戸後期に高部宿が大火に見舞われたときに建て替えられたもので、天狗諸生の乱での刀傷が残されています。その隣の平塚家も通り沿いに明治の近代住居建築を残す旧家ですが現当主曰く「この辺では新しい方の家」とのこと。昭和初期の和洋折衷型住宅や漆喰の土蔵があり、街道沿いの小さな区域に古建築の密集する様は一見の価値があります。清流の水音を聞いていると酒どころだった往時がよみがえってくるようです。

（歴史民俗資料館）